



Title	志賀重昂『日本風景論』における国粹主義と西洋化の融合：書評への応答と改稿に見る「跌宕」と崇高
Author(s)	山田, 志歩
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2025, 58, p. 17-36
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/100908">https://hdl.handle.net/11094/100908</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 志賀重昂『日本風景論』における国粹主義と 西洋化の融合

—書評への応答と改稿に見る「跌宕」と崇高—

山田 志歩

キーワード：志賀重昂／『日本風景論』／崇高／ラスキン／国粹主義

## 1. はじめに

志賀重昂（1863－1927）の著作『日本風景論』（初版1894年10月）は、日本人の風景観を大きく変えたと言われる<sup>1)</sup>。本書においては、雄大な自然風景が「跌宕」、つまりは西洋美学的な崇高（sublime）として評価され、代表として火山が挙げられた。ただし志賀は「跌宕」が西洋由来の概念であるとは述べていない。あくまで、富士山などの急峻な円錐形の火山が「跌宕」の代表であり、日本に独自のものだと喧伝し、国粹として打ち出した。日清戦争期のナショナリズムの高揚にも後押しされ、約10年間に15版を重ねた本書は、火山を国粹、国家の象徴として捉える思想を浸透させたのである<sup>2)</sup>。

本稿では、『日本風景論』に数多く寄せられた書評と、それを踏まえた改稿について精査する。本書を称賛する書評が目立つ一方、僅かながらも「跌宕」が崇高の概念の模倣であり、ラスキンの論と類似していると見抜いた書評もある。これらに対する志賀の応答からは、頑として西洋の模倣を認めず、むしろ日本の風景の優位性、独自性を誇る態度を強固にする姿勢が見て取れる。その他の改稿箇所でも同様に、西洋の文物を恣意的に利用して日本の風景の価値を高め、「跌宕」を国粹として広める手法が見られる。志賀は、

読者の愛国心を煽ることで内実では西洋化を図るという巧みな戦略を取っていたのである。西洋と『日本風景論』の関係について、書評、つまり読者の反応と改稿に現れる志賀の思惑という観点から検討し、『日本風景論』の実像を探る。

## 2. 書評が指摘する西洋の模倣—ラスキンとの類似

『日本風景論』においては、新聞雑誌等に寄せられた書評が第2～5版において巻頭末に追加された。追加の際、書評の大半は本書の紙面を2段組とし、本文に比べ小さい文字で列挙されたが、数点の書評は本文と同じ文字サイズ、レイアウトで掲載され、序文として扱われている。序文とされた書評は合計5点、『地学雑誌』より2点（第2版）、『帝国文学』より1点（第3版）、『地質学雑誌』より1点（第4版）、『ジャッパン、メイル新聞（*The Japan Weekly Mail*）』より1点（第5版）である<sup>3)</sup>。志賀は、序文とする書評の選定理由について、「自著の不足分を補う内容だから」「地学系の専門家／文学者／外国人からの多方面からの評価が分かるから」と述べている（②～⑤：各序文p.1）。

注目すべきは第3版の『帝国文学』、第5版の*The Japan Weekly Mail*掲載の書評にてラスキン（John Ruskin, 1819–1900）の名が出された点である。まず『帝国文学』の書評を取り上げたい。この書評は基本的に『日本風景論』を褒める内容である。日本の風景の美を謳う詩文は多数あるが、志賀に新しいのは、日本に美しい風景が豊富にある理由、また「絶奇なる」理由を論じた点だと言うのである。そして以下のようにラスキンについて述べる。

嘗て英の文傑ラスキンの書を読む、其の天然の諸力を写すや、其立証を理學に求め、叙事精細微に入り奥を極めながら、而も語句麗琢して美玉の如く、章法秩然一句を損する能はざるを見て、其散文の規範となして彼地に行はるゝも亦宜なりと思ふ、今此著に接して矧川氏の文、其立論

の方法より叙述の体裁に至るまで、決してラスキンの下に在る遠からざるを認む、（…）（③：「帝国文学 批評」p.2）

志賀の文章は「文傑」ラスキンに引けを取らないものだと称えるものだが、要するに志賀とラスキンの文章の重なりを感じたということである。このことが志賀に何を思わせたのか、別の書評にも目を向け考察しよう。

『帝国文学』の書評よりも明確に志賀とラスキンの類似を述べたのが内村鑑三（1861－1930）である。内村と志賀は札幌農学校の先輩後輩の間柄である。キリスト教に入信した内村、批判的な立場を取った志賀は政治思想の面では意見の一一致を見ることはなかったが、両者ともに相次いで地理学に関する著作を発表している。それが内村の『地理学考』（1894年5月）と志賀の『日本風景論』（同年10月）である。内村が『日本風景論』の読者となり、書評を寄せたのは当然の流れと言えよう。さて、『六合雑誌』に掲載された内村の書評は、『帝国文学』の書評と同じく第3版の巻末に収録されている（③：「新聞雑誌批評」p.24）。ただし序文には選ばれていない。書評の前半では、内村は志賀を「日本のラスキン」と呼び、『帝国文学』と同様に『日本風景論』がラスキンの著作「近世の画工」、即ち *Modern Painters* に比肩すると評している。内村によれば、特に松柏科植物に関する志賀の記述について、*Modern Painters* の第5巻における青苔に関する論に類似があるとのことである。<sup>4)</sup> 内村は両者の該当箇所を引用しているが、これは志賀の剽窃の疑惑を提示するものではない。志賀がラスキンと同様に、自然に美を見出すという視点から論じたことに賛辞を送るものである。実のところ、*Modern Painters* の第4巻は山岳の美の論で占められ、山岳は“loveliness of color, perfectness of form, endlessness of change, wonderfulness of structure”において優れると述べられている。<sup>5)</sup> このラスキンの論と、変化に富み美しい形状をした日本の火山を称賛する志賀の主張との類似を内村が指摘しなかった理由は不明だが、志賀にとっては命拾い以外の何物でもなかろう。書評の後半で内村は、志賀が「Patriotic Bias（愛国偏）」のあまり西洋の偉大な風

景地を無視し貶めているとし批判している。事実、志賀は西洋の風景地を手放しに褒めることはない。例えばイギリスの「フキンガル窟」と「巨漢ノ石道」を挙げた箇所では、日本の火山群にある類似の風景の方がより優れているとしている（①：p.110）。*Modern Painters* の第4巻にてラスキンは、尖った頂上を持ち四方に急傾斜した山、志賀の言う「美妙なる円錐形」の山がアルプス山脈では希少だと述べている（図1, 2）<sup>6)</sup>。志賀は『日本風景論』本文中では一度もラスキンの名を出すことはないが、ラスキンの論

を意識し、西洋に優って「跌宕」、崇高といえる山岳風景を持つ日本の特異性を示そうとしていることはもはや明らかである。

『帝国文学』及び内村の書評においてラスキンの名が登場したことは、志賀に一定の衝撃を与えるものであったと

言える。『帝国文学』の書評を掲載したすぐ次の頁にて志賀は、「想う鄙著を批評する者、同く「ラスキン」、「ラスキン」の語あり」と、即座に書評への応答を試みている。そこでは江戸時代の赤松宗旦『利根川図志』の一節を引き合いに出し、ラスキンを超える能文者と述べる。つまり、志賀は自身の論とラスキンの類似を認めないばかりか、ラスキンに優る日本の先人の存在を主張し、『日本風景論』の提唱する風景観が元来日本のものであるかのよ

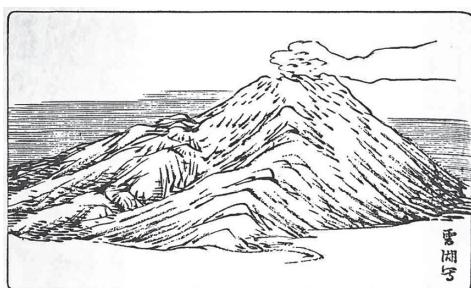


図1 『日本風景論』挿絵（画：樋畑雪湖）  
《浅間山》（①：p.100, 101の間、頁番号なし）



図2 『日本風景論』挿絵（画：樋畑雪湖）  
《理想上の日本 美なる哉国土》  
（③：表紙）

うに示すのである。この赤松とラスキンの強引な比較は、内村に「愛國偏」故の日本贊美と言われても仕方のないものである。ラスキンの名をどうにか読者の意識から消し、「跌宕」の背後の西洋の存在を悟られないよう努める志賀の動搖が透ける箇所である。西洋の崇高の風景観の枠組みにおいて、日本に独特の火山の優位性を説き、西洋に対抗するという志賀の姿勢が、書評への反応の違いに反映されているのである。

第5版に掲載された *The Japan Weekly Mail* の書評におけるラスキンへの言及は、“Although Mr. Shiga does not cover such a wide area as Ruskin, he resembles that great authorpoet in some respects, being one of the most prominent composers of Chinese poems.” (⑤：「ジャッパン、メイル新聞 批評」p.1) というものである。志賀はラスキンほどには広範に論じてはいないとしながら、Chinese poems の分野においてラスキンに類似した詩心を持つ人物だと評価している。*The Japan Weekly Mail* は日本国内で発行された親日的な新聞であり、この評者は日本語に通曉した外国人もしくは日本人である可能性がある。志賀の漢文調の独特の文体を褒める書評は他にもあるため、それらを読んで批評したのかもしれない。つまり、外国人、特に西洋人からの純粹な評価としてこの書評を受け止めることは不適であることに留意しておきたい。さて、ラスキンの名を出され、かつラスキンよりも優るとは評してもらえなかったこの書評を、第5版の段階で志賀が掲載したのはなぜだろうか。ここで、『日本風景論』本文中における外国語文献の引用箇所を見ておきたい。日本語訳を付さずに原文のままで掲載されたのは、僅かに「ケムフェル」、「ミルン」が富士山に言及した文章の引用、Rev. A. Lloyd、A. Miall が日本の海岸を詠んだ詩の引用の計4つのみである。これらはいずれも日本の風景を称賛する内容となっている。ケンペル (Engelbert Kaempfer, 1651–1716) とミルン (John Milne, 1850–1913) が引用された箇所では、志賀は「富士山に対する世界の嘆声此の如し」とまとめた。ロイド (Arthur Lloyd, 1852–1911) とマイオール (James Murdoch, 1856–1921) の詩の引用に関しては、「日本の海岸を看ずんば竟に發し得ざるもの」としている

(① : p.61, pp.182-183)。日本語訳の付加はもちろん、内容に踏み込んだ解説もなされないことから、西洋人により日本の風景が褒められていることが読者に伝わればよいという志賀の意図が分かる<sup>7)</sup>。これを踏まえると、*The Japan Weekly Mail* の記事も、真剣に内容を精査する読者は多くないだろうと考え、「外字の批評亦た対応する所なかるべからず」との口実のもと引用し、西洋人の評価する自著を志賀が誇示していると考えられる。やはり志賀は西洋の模倣をしていることを隠しつつ、西洋に比肩すること、超えることを望んでいたのである。

序文となった5つの書評では、いずれも志賀の火山論に関する言及があり、評者らが志賀の思惑通り火山へ注目したことが窺える。『地学雑誌』、『地質学雑誌』掲載の書評については地（理）学、地質学の専門家によるものため、火山論を歓迎するのは当然とも言える。『帝国文学』、*The Japan Weekly Mail* の評者も火山論に関して高く評価しており、火山を国粹として広めたい志賀の論の核心を正しく捉えた書評として、序文掲載に至ったのだろう。それでは、序文とはならなかった書評においては、火山論は如何に受け取られたのであろうか。まず、『日本風景論』初版に即座に寄せられた反響と言える、第2版巻末に掲載された書評48編（1894年11月30日までのもの、序文となった『地学雑誌』掲載の2編を除く）については、約30の書評において火山論に関する言及が見られる。本書の核となるのは火山論であり、序文となった書評の評者以外の読者もそれを理解していたということが分かる。

第2版巻末の48の書評は全体として『日本風景論』を褒めるものが多いが、中でも『東京経済雑誌』に掲載された批判的な書評は非常に興味深い。

日本風景論と云ふ表題なれば、定めて芙蓉峯の美を説き、琵琶湖の景を談ずると思ひの外、記する所多くは北海道の氷雪、日本の火山脈等の談にして、余輩の如き地文学思想と壯大の觀念に乏しき凡漢には之を読んで毫も快感を生せざるなり、此書の真味を解すべき者は科学的修養ある英雄ならざるべからず (② : 「新聞雑誌批評」 p.5)

評者は自身の知識不足により『日本風景論』を読んでも「快感」を得られなかつたと述べているが、これは皮肉に他ならない。まず、この評者が本書のタイトルから期待したのは芙蓉峰、つまり富士山の美と琵琶湖の景色に関する論であったと書いてある。琵琶湖に関しては近江八景が想定されていると思われる。つまり、従来の名所旧跡を評価する風景観であり、これまでに何度も詩歌、絵画の題材となり定型的に描写されてきたものを愛でるというものだろう。志賀が『日本風景論』によって古典的風景観を打破したことについては、本書に触発されて登山を行い『日本山水論』(1905)などを著した小島鳥水(1873-1948)が高く評価したところである。小島によれば、「『風景論』が出てから、従来の近江八景式や、日本三景式の如き、古典的風景美は、殆ど一蹴された觀がある<sup>8)</sup>」とのことである。名所図的な風景美を語るものとは異なり、火山を始め雄大で力強い「跌宕」の風景を評価する新しい風景観を導入する志賀の論は、『東京経済雑誌』の評者にとっては想定外、余計なことであったということになる。さて、問題は「余輩の如き地文学思想と壮大の觀念に乏しき凡漢」との記述である。これは、評者が地文学は兎も角「壮大」に関しては一定の知識を有することを示している。評者は決して「凡漢」ではなく、『日本風景論』の本質が「跌宕」、崇高の風景に関する論にあることを見抜き、わざわざ「壮大」の語を用いて評しているのである。そう考えると、評者が本書の内容を「北海道の冰雪」と「日本の火山脈等」ばかりだと述べたことも、これらの描写を通して「跌宕」、崇高を伝えたいという志賀の意図を違えず捉えている証左と言えよう。再び冒頭まで戻ると、「芙蓉峯の美」を『日本風景論』が語っていないという指摘にも文面通りではない含意があることが明らかになる。『日本風景論』を一読すれば、志賀が富士山の美に関する論に注力していることはすぐに分かる。だが、その論じ方は科学的に火山としての富士山の形状などを分析し、その上で「跌宕」としての美を称賛するものであり、近代西洋の、ラスキンの自然観に通ずるものである。評者はラスキンの名こそ出さないが、科学的な視点を用いた火山論がそのまま崇高論に繋がると知っており、その上で「芙蓉峯

「の美」が語られていないと批判している。西洋の価値観の枠組みの中で富士山の美しさを称賛する志賀を否定していると言えよう。「此書の真味」を理解しない凡漢を演じる評者は、「此書の真味」に気づいた上で本書を低く評価する書評を残した。<sup>サブライミチ一</sup>そこには、「壮大」というルビが示す通り、志賀の論が先進的なものではなく西洋の模倣にすぎないことを揶揄する意図があると思われる。『東京経済雑誌』の書評は際立って『日本風景論』の本質を理解した書評と言えるのである。

『東京経済雑誌』の書評ほどの鋭さで西洋の模倣を看破したものは、第2版以降の書評も含め他には見受けられなかった。読者に悟られずに風景観の西洋的な近代化を促すという志賀の狙いは、概ねうまく達成されたと見てよいだろう。評者らは、火山論に志賀が重きを置いていることには程度の差こそあれ気づきつつ、それぞれの観点から本書を論じている。改めて序文となった書評を確認しても、志賀の思惑通り火山論に明確に注目し評しているものが並んでいる。志賀にとって最も押し出したい火山論の評価、拡散につながる書評が確実に序文に選定されたのである。また志賀は、ラスキンの論、つまりは西洋近代的な風景観との類似をこれ以上指摘されることはないように釘を刺す文章も付け加えている。隠蔽したつもりのラスキン、西洋の存在が発見されかけ志賀が焦ったことにより、西洋に対抗できる日本を主張するために西洋を都合よく利用する志賀の姿勢は強固になったと言えよう。

### 3. 改稿箇所に見る帝国主義—玉山と「台湾富士」

上記の通り、志賀は『日本風景論』に寄せられた書評に目を通し、必要に応じて序文として扱うことで返答を試みている。ラスキンとの類似に関しては否定する内容と言ってよいコメントが添えられた。その際には日本の先人、日本の風景が改めて称えられ、本書の国粹主義的側面も強く表れている。ここからは、序文ではなく本文内における改稿の内容に注目したい。本稿では、序文として5つの書評の掲載が行われた期間と重なる第2～5版で

の改稿箇所を分析する。当時は日清戦争が終結し、社会情勢に大きな変化がある時期である。ナショナリズムの動きと改稿内容の呼応も確認していく。

初版から第2版では重要な変化が見られる。それは本書の「緒論」における「瀟洒」、「美」、「跌宕」という3つの日本の風景の評価軸の登場である。初版の「緒論」では、「日本風景の渾円球上に絶特なる所因」として「一、日本には気候、海流の多変多様なる事 / 二、日本には水蒸気の多量なる事 / 三、日本には火山岩の多々なる事 / 四、日本には流水の浸蝕激烈なる事」の4点を逐一解説していくと本書の方針が示されている。第2版では、同じく「日本風景の渾円球上に絶特なる所因」を「瀟洒、美、跌宕なる所」として、順に箇条書きで説明が付されている（①：pp.2-6、②：pp.1-10）。分量で言えば明らかに「跌宕」の説明が多く、また初版で挙げられた気候・海流、水蒸気などの4点については全て「跌宕」に分類されている。志賀が「跌宕」を本書の中心としたいことは明らかである。また、志賀の説明を参照するに、「瀟洒」及び「美」には梅花や秋月、春霞や松といったものが目立ち、いわゆる花鳥風月が当てはまる。従来詩歌の題材として親しまれたこれらと比べると、「跌宕」として挙げられる荒々しい自然現象は異質である。志賀は、「跌宕」を印象付けるため、敢えて「瀟洒」、「美」という評価軸を持ち出して「跌宕」と並べたと考えられる。なお、この「瀟洒」、「美」はバーク（Edmund Burke, 1729 – 1797）の言う“beauty”と重なる。バークは“beauty”を“sublime”と区別されるものとし、小さく纖細、滑らかといった特徴を挙げている。<sup>9)</sup> 志賀は“beauty”が日本の伝統的な風景観に合致すると気づいた上で、「跌宕」との違いの際立つものとして紹介したのである。ラスキンと同様にバークの名も隠され、西洋の影を消そうと努める志賀の苦心が見て取れよう。こうして読者は、花鳥風月と同等、もしくはそれ以上に評価されるべきものとして「跌宕」があるらしいと「緒論」にて知り、「跌宕」を意識して読み進めることとなる。

続いて第2版から第3版で見られる変化を確認したい。ここでも再び「緒論」に興味深い改稿箇所がある。上述の通り第2版では、「瀟洒」、「美」、「跌

宕」のいずれも箇条書きの形でその説明がなされた。第3版においてはそれに追加する形で、「瀟洒」の説明箇所には「日本の秋」、「美」には「日本の春」という小見出しがそれぞれ設けられている（③：pp.4-5, pp.7-8）。「日本の秋」では紅葉について、「日本の春」では鶯花について語られるという特段目新しいものではないが、注目すべきは引き合いに出される外国の存在である。例えば「日本の秋」においては、イギリス人が秋の景観を褒める「ニューンハム、パンボールン」<sup>10)</sup>について、紅葉するカエデがないため「秋の大觀を知覚」できないと評する。続けて、西洋を褒めない志賀にしては珍しくも「ウォルズワース」（William Wordsworth, 1770－1850）や「スコット」（Sir Walter Scott, 1771－1832）の自然を描写するロマン派の詩人としての優秀さを称えるが、結局は彼らもイギリスにいる以上は紅葉を見ることができないのだから惜しいとして、日本独自の秋の風景の美しさを誇示している。先述した内村の書評において、志賀が西洋の優れた風景地を無視しているとの指摘があったが、志賀はここでイギリスの風景地の名を出し、それよりも日本の風景の方が優れているとまとめる。徹底的に日本の風景の素晴らしさ、独自性を説く志賀が、「愛國偏」と鋭い表現で批判してきた内村の書評を意識して改稿した可能性は高いだろう。盲目的に日本の風景を評価しているわけではなく、西洋にも目を向けた上で論じているのだという証明も試みていると思われる。「日本の春」での改稿においては、「支那人、朝鮮人」は鶯花の真の美しさを知らない、また欧米諸国の中には至っては梅も桜もないため全く良くない、という主旨の内容が語られる。中国や朝鮮について蔑むことで日本の優位性を示し、西洋に対しては日本の独自性を主張して対抗する手法は、本書において何度も繰り返されるものである。伝統的な「瀟洒」や「美」、さらには「跌宕」に当てはまるどの風景についても西洋より優るとアピールすることは、先述の『東京経済雑誌』掲載の書評のように「跌宕」と崇高の概念の類似を見抜く読者の目眩ましにもなる。「瀟洒」、「美」、「跌宕」の3本柱にすることで、国粹として「跌宕」の火山を押し出すことを当然のように見せられる。「緒論」以外には、「日本には気候、海流

の多変多様なる事」の章において松柏科植物の具体例、「日本には水蒸気の多量なる事」の章において「(十) 東京に於ける水蒸気の現象」の節、「日本には火山岩の多々なる事」において火山に見られる要素の追加が見られる(②: p15, p.55, pp.62-63、③: p.19, pp.59-60, pp.68-69)。松柏科植物に関する論は、内村の書評においてラスキンの*Modern Painters*の論法との類似が指摘された箇所である。ラスキンは青苔の種類について言及してはおらず、一方で志賀は初版より挙げていた日本の松柏科植物の具体例をこの改稿でさらに増やしている。松柏科植物を含め複数の箇所において、日本に独自の特徴が見える点を詳細に論じようとする点からは、内村を始めとするラスキンの*Modern Painters*との類似の指摘を跳ね返したいという志賀の思惑が読み取れる。「緒論」の改稿と併せて鑑みると、第2版から第3版への改稿は、西洋に対する日本の優位性、独自性を誇る志賀の姿勢がさらに明白になるものであったと言えよう。

第3版から第4版の間の改稿に目を向けよう。大幅な改稿は「日本には流水の浸蝕激烈なる事」の章にて多数見られる(③: pp.185-196、④: pp.186-200)。そして続く「日本の文人、詞客、画師、彫刻家、風懐の高士に寄語す」の章で見逃せない改稿があるが、他の章では微修正があるかないか、といったところである。先に「日本には流水の浸蝕激烈なる事」の章の改稿箇所を挙げていく。まず、「(二) 花崗岩」の節での広島県の蛇喰磐の紹介、「(三) 石灰岩」の節での奈良県の権現窟の紹介といった、それぞれの節に合った風景地の具体例の追加が行われている。「日本には火山岩の多々なる事」の章に比して具体例の少なかった本章を補完するものと言えよう。「(三) 石灰岩」においてはこの他に、本論の末尾に組み込まれる形で「奇觀の更に奇觀」として川合の切通を説明する改稿箇所もある。これは志賀の出身地である愛知県のものであり、第13版では表紙絵の題材となる風景地である。これに関しては、志賀の郷土愛の表れと考えられる。さらに、「(四) 各岩の浸蝕に伴へる雑多の結果」の節では、新たに野村文夫(1836-1891)による『遊鬼通路渓記』(1887)から、鬼通路の崖、岩、そして沢の「奇觀」を

述べた箇所の引用が掲載されている。鬼通路とは一般的な呼称ではない。和歌山県、奈良県、そして三重県の境界に位置する峡谷である瀧八丁の、三重県川の集落である木津呂を雅化したものだろうと水谷（2017）は述べている。<sup>11)</sup> 水谷によれば、当時の瀧八丁の知名度は低く、紀伊地方外から訪れた者は野村以外に数えるほどしかいない。志賀も「その名いまだ多く世間に喧伝籍甚せずといへども、洵に流水浸蝕の美、奇、大を代表するもの」としている。『遊鬼通路渓記』からも読み取れることだが、瀧八丁の「奇觀」は「跌宕」の風景と言えるだろう。志賀は『日本風景論』において、実際に火山に登り「跌宕」の風景を体験することを推奨したが、野村は瀧八丁の険しい崖、岩場に足を踏み入れてその「奇觀」を語っている。野村による現地での体験談を引用することにより、志賀は火山以外の「跌宕」の風景地でも体験することの重要性を語ろうとしたと思われる。知られざる風景であった瀧八丁の「発見」は、これまで注目されてこなかった「跌宕」の風景の「発見」の一例と言えよう。この「日本には流水の浸蝕激烈なる事」の章では、以上に述べた箇所以外にも軽微な改稿箇所が散見される。本章の改稿への注力は、先述の通り「日本には火山岩の多々なる事」の章の充実具合とのバランスを取るものであると同時に、火山以外の「跌宕」の風景も素晴らしいと主張し、読者に実体験を推奨するものと考えられる。そして次の注目すべき改稿箇所は、「日本の文人、詞客、画師、彫刻家、風懐の高士に寄語す」の章に現れる。以下は第3版からの引用である。

夭桃白李、嫩綠軟江、佳は則ち佳、何々の三景、何々の八景、愛すべきは則ち愛すべし、而かも是れ未だ諸君士が満腔の心血を濺ぐに足らざるもの、諸君士が満腔の心血を濺ぐに足るは、彼の水蒸気に在り、活火山、熄火山、火山岩に在り、流水の激烈なる浸蝕に在り（③：p.199、④：p.203）

第4版では下線部が削除されている。微々たる変化に思えるが、この削除が

持つ意味は大きい。『東京経済雑誌』掲載の書評において、従来の名所図的な風景の美を語らない『日本風景論』に落胆したこと、さらには「<sup>サプライミチー</sup>壮大」という単語を出して本書の本質が「跌宕」、つまりは西洋的な崇高を語る論であることが皮肉的に述べられていると既に論じた。この、従来の名所図的な風景というものが三景、八景に当たるわけだが、志賀はこれらの語をわざわざ本書から除いている。これらの言葉が含まれない第4版では、読者は三景、八景を想起することなく、水蒸気、火山といった「跌宕」の風景に意識を向けることとなる。また、先ほどの「日本には流水の浸蝕激烈なる事」での瀧八丁の追加と併せると、古来愛されてきた三景、八景に入るような風景地ではない、知られざる「跌宕」の風景を「発見」せよという志賀の思想が強く感じられるのである。第2版での改稿箇所として、花鳥風月的、伝統的な「瀟洒」、「美」の風景觀が追加されたことを論じたが、三景、八景という語を出さずに「跌宕」と並ぶ形でカテゴライズされたことも興味深い。志賀が『東京経済雑誌』の書評を意識してこれら改稿に至ったのか知ることはできないが、本書の核が「跌宕」であって伝統的な風景美ではなく、しかし「跌宕」をさも日本に元来存在するものであるかのように語りたいという志賀の思いが強まっていることは確かである。「瀟洒」、「美」を目眩ましに、読者が自然と日本の古典的な風景觀を脱するように誘導し、「跌宕」の風景の「発見」に導くという志賀の手法は、改稿の中で改良されていく。多くの読者は「跌宕」が西洋的な風景觀であるとは気づかないまま、自身の風景觀を更新し、「跌宕」を「発見」して体験することとなるのである。

続いて、志賀が社会情勢に素早く反応して改稿を行なった箇所に目を向ける。1895年、日本が日清戦争に勝利し、下関条約にて台湾、遼東半島、澎湖諸島の領有が決定したことを受け、第4・5版で改稿が行われた。志賀は初版の段階から、台湾、山東半島の領有を前提とした記述をしている。それは「日本の文人、詞客、画師、彫刻家、風懐の高士に寄語す」の章にて、日本各地の富士山に類似した山を「○○富士」とすべきだと述べた箇所である。

我皇の版図にして台湾島に拡張せば、熱帶圈裡の景象は新に日本の風景中に加入し來り、兼て山東半島にして我皇の版図に納まらんか、山東半島は、支那人が古往今來「岱宗」と仰望する泰山の在る處、乃ち新山河の雲煙水光を描き出し、「日本風景論」の材料を膨大して、改刷重版し、以て更に、風懷の高士、彫刻家、画師、詞客、文人の一大粲を博せんか、（…）台湾の最高峰玉山は宛如我が富士山に形似するを以て「台湾富士」と転名し、山東省の泰山は「山東富士」と変称し、齊しく我皇の版図中に在りて富士山の名称を冒さしめんことを、（…）（①：pp.188-189、④：pp.205-207）

以上は初版からの引用だが、当初から志賀は改稿を前提とし、台湾と山東半島の領有を待ち構えていたことが分かる。そして玉山と泰山という「跌宕」の風景を手に入れ、それを作家、画家などの芸術家らが作品にすることも望んでいる。実際に台湾の領有が決定したのは1895年の4月だが、志賀は翌月には第4版を刊行している。上記の引用と同じ箇所では、下線部の3箇所がそれぞれ次のように改稿された。まず「我皇の版図にして台湾島に拡張せば」が「今や我皇の版図は台湾島に拡張して」、次に「兼て山東半島にして」が「兼て期年山東半島にして」、最後に「泰山は「山東富士」と変称し」が「泰山は期年「山東富士」と変称し」といった通りである。日本の領土となった台湾の部分はもとより、山東半島に関する部分でも「期年」と変更が見られる。日清戦争の勝利により志賀の帝国主義的思想に勢いがつき、近い将来には山東半島も獲得できるという確信を持ったのだろう。志賀の西洋への対抗心は植民地獲得競争への参入という面でも表れている。そして「跌宕」の代表である富士山を頂点とした火山大国として権威を強めるべく、「○○富士」になり得る山を持つ地域の獲得を強く主張しているのである。領土獲得後の改稿は志賀本人によって予告されていたうえ、実際の対応は非常に迅速なもので、玉山を「○○富士」の一部に組み込むことが志賀の論にとって重要であったことは明らかである。結局のところ、第15版が出

版される 1903 年までの間に日本が山東半島を得ることはなく、「期年」の記載は残されることとなった。また、玉山については志賀の言う通りに「台湾富士」とはならなかったものの、1897 年に明治天皇によって「新高山」と命名されている。<sup>にいたかやま</sup> 1896 年の玉山の臨時測量により、その標高は 3,952m と富士山 (3,776m) よりも高いことが判明し、これを受けたて新しい最高峰という意味で「新高山」と改称されたのである。志賀は「新高山」命名後も「台湾富士」と転名し」という文言を変更せず、山東半島に関する「期年」とともに第 15 版まで残している。これは、日本内地における他の山に関する正式名称ではなく通称として「○○富士」と呼ばれる例が多く、国民が「新高山」を「台湾富士」として親しむことを期待したことと推察される。「○○富士」を持つ日本の国土として台湾を捉えることで、富士山を頂点におく日本の「跌宕」の風景の枠組みに組み込み、西洋と並び対抗できる日本像を打ち出そうとしている。

第 4 版にて下関条約の内容を反映させた志賀は、第 5 版では同章の末尾に見開きで通常より 3 倍程度大きい頁を挿入し、「台湾の風景」と題した文章を載せている ((5) : p.206, 207 の間、頁番号なし)。志賀は台湾について、周囲に海があり水蒸気は多量、土壤はほとんど火山質に違いないと述べ、最終的に「火山岩の磊落峭拔して洋水の怒激浸蝕する處、宛として日本版図内の地」であるとまとめる。実際の台湾では主に北部の限られた地域にしか火山ではなく、志賀の記述は大げさなものと言える。尤も、台湾の地質に関する調査はこの段階では進んでいたとは言えない。志賀が継続的に目を通していると思われる『地学雑誌』においては、1895 年 6 月に農業技術者・横山壮次郎 (1868-1909) が台湾に地質調査に渡ったことが記され、同時に「台湾島の地質調査は目今の急務なり」という記事も出ている。<sup>12)</sup> また、志賀の参照元と断言することはできないが、1895 年 5 月の『地質学雑誌』の記事には、「北方に於ては現今まで活動せる火山あり」、「兎に角台湾は東亜細亜の火山國なること疑なし」との記述がある。<sup>13)</sup> 日本の領土に属するものとして共通点を探したい志賀が、台湾の地質を全体として火山質と想像するのは仕方が

ないとも言える。この若干大げさで誤情報を含む「台湾の風景」には、古一念、つまり古島一雄（1865－1952）によって書かれたものの引用箇所もある<sup>14)</sup>。古島は1888年より雑誌『日本人』の記者として活動しており、政教社に属する志賀との親交がある。そして陸羯南（1857－1907）の創刊した新聞『日本』の記者でもあり、1895年3月より『日本』の従軍記者として特派という形で日清戦争の報道に携わっている。志賀が引用した文章は、このときに古島が実際に滞在した台湾について述べたものである。台湾を目の当たりにした人物からの証言は、台湾の獲得を重要視し、また実況性のある内容を求める志賀にとって必須であっただろう。古島は台湾の植物、動物、そして農業をする人の織りなす風景の趣について述べており、新たな領土も日本に類して美しいと述べたい志賀の論に合うものと言える。さらに、古島に同じく従軍記者として台湾に渡った中村不折（1866－1943）による『台南の風景』、『台北の風景』の2点の挿絵も掲載された（図3）。両者とも船から海を挟んで台湾島を見るというものだが、この視線は西洋人が初めて日本を訪れた際に繰り返し向けてきたものと重なる。中村本人が意識的でなくとも、「日本人がまだ見ぬ日本」を「発見」する構図は、西洋人が征服対象として日本、東洋を見る視線の反復に他ならない。志賀がひた隠しにしつつ推し進める風景観の西洋化は、図らずも挿絵にも反映されたと言えよう<sup>15)</sup>。台湾にまつわる箇所の改稿は、国粹と主張する「跌宕」、火山のある風景が殖民地にも存在することを伝えている。そして、日本の延長としての台湾の風景を西洋諸国に並ぶ征服者として「発見」し、日本人のナショナリズム意識を高

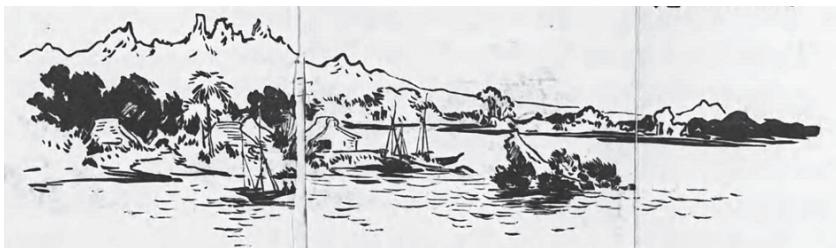


図3 『日本風景論』挿絵(画:中村不折)《台南の風景》((5): p.206, 207の間、頁番号なし)

揚させるものなのである。

第2～5版に見られる改稿は、書評に対する明確な応答として行われたものではない。だが、西洋の風景と比較して日本の独自性を語り、新たな「跌宕」の風景を「発見」せよと日本人に促す改稿は、内村や『東京経済雑誌』の書評に見られるような西洋の模倣の指摘、さらには三景、八景のような古典的風景観から逃れようとするものと考えられる。台湾の玉山という新たな「跌宕」の風景を得た志賀は、ナショナリズムの波に乗り、国粹としての「跌宕」論を強固にし、西洋への対抗心も昂らせていったのである。

#### 4. おわりに

志賀は『日本風景論』初版の段階から、「跌宕」としてラスキンらの名を出さずに崇高の概念を説いた。この志賀の態度は、いくつかの書評においてラスキンの論や近代西洋的な風景観との類似が指摘されたことにより、さらに強固なものとなる。西洋人が日本の風景を称賛したという文脈では西洋人の名を躊躇いなく出して引用する志賀は、「跌宕」、つまり崇高が西洋の先進的な風景観であるということについては改稿を重ねる中でも隠し続ける。それはラスキンより優れた能文者として赤松宗旦を挙げるといった危ういものであり、また、日本の伝統的な風景観に重なる「瀟洒」や「美」を目眩ましに「跌宕」の導入を試みるといった奇策とも言えるものであった。日本の台湾領有時にも、玉山を「発見」した志賀は、富士山を中心とする日本の「跌宕」の風景の枠組みに玉山を組み込んで誇示している。中村による海上から台湾を描いた挿絵に表れる通り、それは西洋と同じ手法で征服者となる日本の姿であり、志賀が求める西洋に対抗し得る日本像であったと言える。

## [注]

- 1) 内田芳明(2001)『風景の発見』朝日新聞社、大室幹雄(2003)『志賀重昂『日本風景論』精読』岩波書店など。本書内での洋書からの剽窃箇所を特定するものもある(黒岩健(1979)『登山の黎明「日本風景論」の謎を追って—』ペリカン社など)。筆者は、志賀による剽窃と引用の巧みな使い分けを精査し、西洋の模倣を隠蔽しつつ崇高の概念を導入し、風景観の近代化と西洋への対抗を図る志賀の狙いを指摘した(山田志歩(2023)「志賀重昂『日本風景論』における剽窃と引用—国粹主義と西洋を志向する近代化の葛藤—」『若手研究者フォーラム要旨集』(7), pp.71-74)。
- 2) 1934～1936年に選定の日本初の国立公園12箇所中10箇所が火山であったことも本書の影響とされる(丸山宏(1994)『近代日本公園史の研究』思文閣出版)。なお、本稿にて取り上げる初版～第5版までの出版年は次の通りである。初版：1894年10月、第2版：1894年12月、第3版：1895年3月、第4版：1895年5月、第5版：1895年7月。引用時は(版:頁)と本文中に記載し、下線は引用者による。
- 3) 嶋南生「志賀重昂先生の日本風景論を読む」、山上萬次郎「矧川志賀君の日本風景論を読む」(以上は1894年『地学雑誌』6(71)掲載)、評者不明「日本風景論」(1895年『帝国文学』1)、小川琢治「日本風景論を評す」(1895年『地質学雑誌』2(17))、評者不明「MR.SHIGA'S "NIPPON FUKEIRON" (JAPANESE LANDSCAPES)」(1895年4月27日『ジャッパン、メイル新聞(The Japan Weekly Mail)』)
- 4) Ruskin, J. (1891), *Modern Painters: vol. V*, New York: Wiley. pp.99-100
- 5) Ruskin, J. (1890), *Modern Painters: vol. VI*, Boston: Dana Estes. p.432
- 6) 同上 p.228。ラスキンは“Perhaps in describing mountains with any effort to give some idea of their sublime forms, no expression comes oftener to the lips than the word “peak.””とし、続けてアルプスの山を例に挙げて希少性を説明している。
- 7) 当時、日本には海洋を描いた詩文が少なく、志賀が英詩を引用せざるを得なかつたこと、またロイドとマイオールの詩に関しては無名の作品であることの指摘がある(橋本順光(2024)「倭寇物語の創造：近代日本における海賊の発見とジョン・ディヴィス殺害事件(1605)」『人文学林』1, pp.143-164)。博物学者のケンベルは時代が些か古く、ミルンはロイドらと同じく著名文筆家とは言えないお雇い外国人である。初版から彼らの詩文が引用され、一方でラスキンの名はひた隠しにされたことを加味すると、志賀が当初から日本の優位性を示すことができるよう西洋を利用していたことがより明白になるのである。
- 8) 小島烏水(1937)「解説」志賀重昂『日本風景論』岩波書店 pp.3-17
- 9) Burke, E. (1957), *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful*. 2<sup>nd</sup>. ed., London: R. and J. Dodsley. pp.161-239
- 10) Newham, Pangbourneはいずれもイングランドのテムズ川沿いの地区である。

- 11) 水谷知生(2017)「明治期の風景の成立への出版の影響—滝八丁を例として—」『地域創造学研究』27(3) pp.119-142
- 12) 「横山氏の台湾行き」pp.333-334、「台湾島の地質調査は目今の急務なり」p.334(『地学雑誌』1895,7(6))
- 13) 石井八万次郎・小川琢治(1895)「台湾島」『地質学雑誌』2(20) pp.306-312
- 14) 1895年7月12日『日本』2面「台北遊記/一念生」
- 15) 谷文晁(1763-1841)による「公余探勝図」(1793)における海岸、港湾を描いた作品に関して、日本に来航したオランダ船の舶載銅版画からの影響を見出す研究がある(中村真菜美(2015)「谷文晁筆「公余探勝図」の制作について」『フィロカリア』32, pp.45-69)。中村は、蘭学が本格化した寛政期、谷も西洋画に強い関心を持ち舶載銅版画を参照したとしている。留意すべきは、海上(船上)から上陸予定の海岸、港湾を描くという征服者としての西洋の視線が、そうとは知らない谷によって無邪気に輸入されたという点である。この視線が『日本風景論』において、台湾という初の植民地獲得時に反復され、帝国主義政策を推し進める西洋諸国と並び対抗する日本の立ち位置を示唆することとなった。挿絵を描いた中村不折、志賀、読者が明確に意識せずとも、西洋の模倣が繰り返されたと言えよう。

(大学院博士前期課程修了)

## SUMMARY

## Nationalism and Westernization of Perceptions

## in Shiga Shigetaka's "Nihon Fūkeiron"

The Dynamics of "Tettō" and the "sublime" in Reviews and Revisions

Shiho YAMADA

This paper examines the subtle writing strategies employed by Shiga Shigetaka in "Nihon Fūkeiron" (*Japanese Landscapes*, 1894), to evoke a sense of patriotism in the Japanese readers while promoting the Westernization of the Japanese perception of landscapes. This study focuses on his responses to readers' reviews and subsequent revisions, reflecting his aforementioned strategies.

In "Nihon Fūkeiron," the grand natural landscapes are referred to as "Tettō" (跌宕), with volcanoes highlighted as being the prime example of such landscapes. The concept of "Tettō" resembles the notion of the "sublime" and reflects the influence of the Western philosophers on his thought, such as Ruskin and Burke. However, Shiga deliberately avoids acknowledging Ruskin's and others' contributions, to conceal the Western origin of "Tettō." Instead, he insists that conical volcanoes, such as Mt. Fuji, are unique examples of "Tettō" landscapes and emphasizes their nationalistic value.

The widely acclaimed "Nihon Fūkeiron" received numerous reviews and published in 15 editions. Some reviews highlighted the overlap between "Tettō" and the concept of the "sublime." In response, Shiga repeatedly claimed that the Japanese landscapes surpass the Western ones, reinforcing his stance that he was not imitating Western ideas. A thorough examination of the revisions reveals Shiga's strategy of selectively employing Western ideas to elevate the value of the Japanese landscapes and effectively promote "Tettō" as a nationalistic concept. Moreover, upon Japan's annexation of Taiwan, Shiga demonstrated an imperialistic stance by "discovering" Mt. Jade as a new "Tettō" landscape and incorporating it into the landscape framework centered around Mt. Fuji.

Shiga adamantly refuses to acknowledge his imitation of the Western ideas. However, he certainly believed that Japan needed to become a conqueror using the same methods as the West to counteract Western impact.